

3 - 2 健全な運営への転換を考えたい



大胆な発想が大きな効果を生む

・“もうこれ以上打つ手がない”と考えるのではなく、“利用者にとって何が必要か”の発想で、これまでの取組みの枠組みから大きく発想を転換することで、利用者の増加、運営費の削減などが図られ、持続可能な取組みにつながることもある。

知恵袋（その5）

- 「700円×2人」ではなく「200円×7人」の発想で、市民に乗ってもらう・愛用してもらうバスを実現 ~ 上限200円バス ~（京都府京丹後市）
- ・料金が1,000円以上するような、とても乗れない高価なバスから誰でもが気軽に乗れるバスへの転換を潜在的な利用ニーズを把握した上で実施。
 - ・潜在的なニーズについては、代替手段が乏しくバスを利用すると考えられる層（高齢者や高校生）を中心とした地に足のついた調査を実施し、マーケットの相場観を担当者が把握。
 - ・上限200円というインパクトを持った運賃で利用需要を喚起。

事前アンケートをもとに上限200円バスを実現

- ・京丹後市でも、路線バスの利用者は減少を続けており、路線バスへの市の補助金は増加を続けていたが、市内のバス運賃の上限を200円にするという、大胆な発想で大きな変革を試みた。
- ・実証実験を行う前に、市民約8千人にアンケートを行い、その結果、バス運賃については、「200円～300円」の回答が約6割を占めた。これと並行して、市の担当者が、バス運賃を低額化（上限200円）した場合においても、乗車人数が概ね2倍に増加すれば、補助額が増加しないとの試算を行った。また、高校生と意見交換を行い、料金を値下げすれば、従来、バス運賃が高く、マイカーによる送迎の通学を余儀なくされていた高校生が、一定程度バス利用に転換するとの感触を得ており、大胆な発想が実現した背景には、このような定量的な分析、利用者の真のニーズを深く聞くことなどがあった。
- ・市民へのアンケート、高校生へのアンケート、地元との協議を2年間で十数回重ね、運行後も利用者のニーズを把握し、運行経路の変更、病院へのバス停設置などを行った。
- ・その結果、取組み後の利用者が3年目で約1.89倍、運賃収入が約1.12倍になり、市からの補助金額も、予想された補助金額を大幅に減らすことに成功した。



写真 3-5 市民から喜ばれるバス交通



写真 3-6 にぎやかな車内

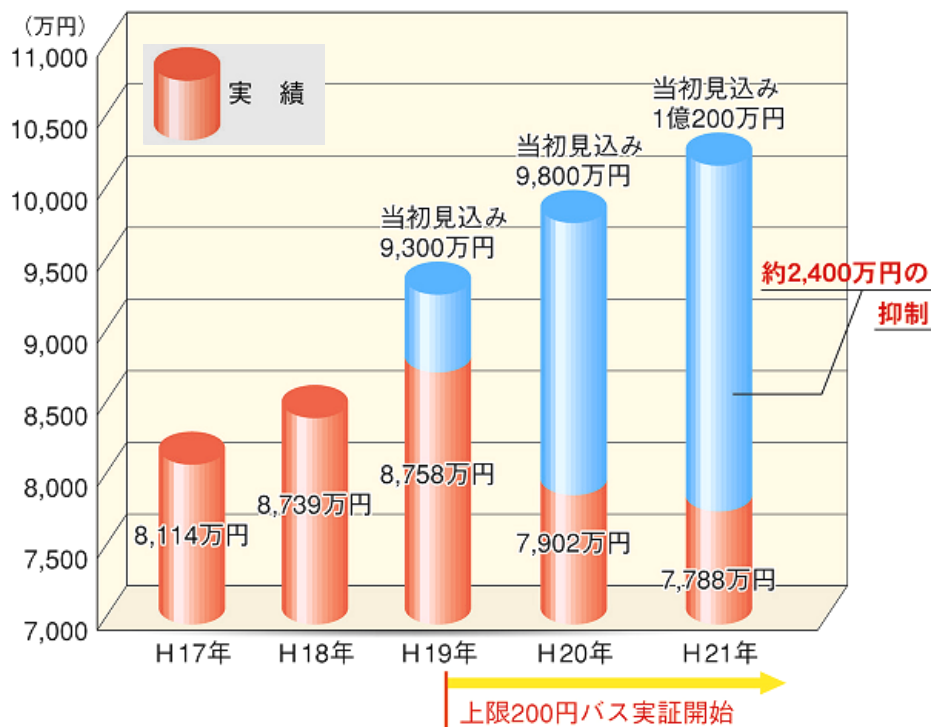


図 3-7 路線バス（丹海バス）への生活指定路線運行に対する市補助金額の推移

（出典）京丹後市提供資料

*** このことにも注目**

新しい取組みを成功させるためには、交通事業者との3年間にも及ぶ協議があった。ターゲットを高校生、高齢者に絞り、数多くのヒアリング、アンケートを実施
 利用者の声を使いやすい路線に変更
 バス停の位置を病院の入り口（敷地内）にするなど、利用者の“便利さ”を向上